

わが骨太人生譚

題字：阿部豊寿
(石川県書美術連盟理事)

加能人物列伝

連載

(株)エムアンドケイ代表取締役
日本回転寿司協会・直前会長

《上》

木下 孝治 氏 (金沢市)



木下孝治 (きのした・こうじ) 氏略歴

1951 (昭和26) 年12月金沢市生まれ。70年金沢市立工業高建築科卒。北陸ミサワホーム、中元建築設計事務所、くみあい施設サービスを経て、父親の工務店を引き継ぎ78年に(株)木下建築デザイン事務所社長、94年に岐阜県羽島に魚市出店、95年に金沢に回転ずし店開業、99年4月にエムアンドケイを創業・社長就任。2011年日本回転寿司協会発足・初代会長。金沢市茨木町。

高級回転寿司の「金沢まいもん寿司」などを台湾含め全国に31店チェーン展開する(株)エムアンドケイ(金沢市)の木下孝治代表取締役(68)は1級建築士の国家資格を持つ。同市八日市の本社は自ら設計したログハウスの構えており、(株)木下建築デ

誇り高き父の背中見て育つ

1級建築士の設計事務所設立

ザイン時代から使っている。回転寿司の異業種に転換するに当たり、「新鮮なネタを腕の立つ職人が握った本物の寿司、金沢の伝統工芸を醸し出す落ち着いた創作空間」をコンセプトにしており、建築家らしく「人づくり・店づくり」へのこだわりが経

営の真骨頂である。木下のサクセスストーリーは、何度も失敗、挫折を乗り越えた軌跡を描く。

木下は終戦から6年経た1951 (昭和26) 年12月、金沢市街地を流れる犀川左岸に位置し現在、室生犀星記念館がある千日町(旧・裏千菊

町)に生まれる。父・喜久治(享年68)と母・孝子(同92)の4人兄弟姉妹の末っ子二男で、長兄とは7歳離れ、姉二人から可愛がられて育つ。

「武士は喰わねど」の薫陶

木下の父親は、幼くして父を亡くし、女手で育てられたが、進学を薦めた母の反対を押し切り、勤当されながらも大工になり、建設会社を興した実業家。加賀藩の武士の家系からか、プライドが高く、木下は小



ログハウスのエムアンドケイ本社

さい頃から「武士は喰わねど高楊枝」や「鶏口となるも牛後となるなかれ」といった諺を聞かされて

育つ。

父が経営者だったことから家計は比較的裕福で、「私が小学校を卒業する頃にはテレビも車もあった」と記憶する。叔父にあたる父の弟を経済的に援助し、東京帝大を卒業させてもいる。叔父は小学校の校長を務め、木下の兄は倉庫精練に勤めたサラリーマン。実業家になった木下が最も父親の血を受け継いだといえようか。

「父は威厳があり、こわい存在だった。苦勞人だったせいかわり、無駄遣いにはうるさかったが、代わりに使うときにはドンと使う。特に食べ物には、ちゃんとお金を出してくれて、小さい頃からお寿司屋さんにもよく連れて行ってもらった」と回想する。木下が建築設計の業務から魚屋や回転寿司業界に参入し、今日まで思い切った投資を続けているのは父親の背中を見て育ったからに違いない。

もともと、幼少の頃、焼き魚の骨をきれいに取って食べることをしつけられていたが、2回、ノドに骨が刺さり、耳鼻咽喉科まで行って痛い目に遭った体験から「20歳まで食べ物の中で魚が一番嫌いだ。それが今、魚屋もやっているから人生は不思議やな」と吐露する。

小学校は昨年3月に閉校した新登町小に通った。同小は菊川町小と統合し犀桜小になり、新校舎を新築中である。戦災にあわず、狭い小路に木造の古い家屋が建て込む金沢らしい町中で遊んだが、近くに犀川もあり、「金沢城址・兼六園へも歩いていけ、秘密の基地を作ったり、石垣を登って探検したり、冬はスキーをしてよく遊んだ」という。城南中学では卓球部に所属したが、冬場は得意のスキーで金沢市体などに出場する。

金市工山岳スキー部キャプテン
高校は父親に薦められてか金沢市立工業高建築学科に進学する。



幼少の頃、両親（後ろ）と

1960年代は日本の高度経済成長期。建築家は憧れの職業で、石川県内の高校にあっても建築科の進学希望者が多く、当時、金市工建築科は二水、桜丘高の進学校並みに入試の偏差値は高かった。部活は山岳スキー部を選び、キャプテンを務める。

国体出場などの賞歴はないが、冬場に入ると金沢市と南砺市の県境に

同窓生の一言

大西 憲治氏

大宗機代表取締役会長
金沢市問屋町



勉強家で機を見るに敏

木下社長とは金沢市の同じ新登町小校下で竹馬の友です。城南中では卓球部も一緒、冬になると兼六園周辺でスキー遊びをやり、金沢市のスキー大会に彼を含め3人が借り出されたものです。高校は

私が金沢商業、彼が金沢市立工業と分かれましたが、社会人になってからも仲良く、夫婦揃って付き合っています。

彼は学生の頃から大人しく真面目でした。読書家であり、チベットの仏教のドライラマの本を読んで良いと思ったのか、会いに行く行動力の持ち主です。

決して商人じゃないが、機を見るに敏といえ、最初、ヒト・モノ・カネがない中、苦勞して異分野の事業を成功に導いた立派な経営者です。



小学校入学



中学生

ある医王山などでかけ、アルペンスキーで心身を鍛えた。エムアンドケイの本社事務所がログハウスであるのも当時から山小屋に親しんだ証しであり、山登りなど自然から学んだことも多いようだ。

医王山見上峠の見上山荘で合宿し「湯原忠政(故人)夫妻には随分世話になった」と懐かしむ。「山の上で生きるか死ぬかと言うときに、好き嫌いなど言っていられない。湯原さんは甘えているから好き嫌いがあんだとおっしゃって。それ以来、自分の甘えだと思え変わると魚がとっても美味しく食べられるようになった」と述懐する。

住宅会社に就職、3社転職

金市工を卒業した1970(昭和



金市工山岳スキー部員

45)年3月は、大阪で日本万博が開幕、地元では県の人口が100万人を突破、同年11月に金沢港が開港している。就職先は洋風プレハブ住宅を展開する北陸ミサワホーム。木下が入社した年の7月にミサワホームの大陸の販売代理店から独立したが、木下は設計の仕事半年やり中元建築設計事務所(金沢市)に転職した。

建築設計という技能の持ち主とあってサラリーマンの就職感覚は持ち合わせていなかった。就職当初から父の教え通り一國一城の主「鶏口」になることを目指しており、石川県内農協関係の住宅、施設を整備する「くみあい施設サービス」を経て27歳のとき工務店を引き継ぐ。父親はその2年後他界した。

25歳のとき、難関国家資格である1級建築士を1回でパスしており、独立できる自信があった。ただ、「父親に似たのか、プライドが高く、お

世辞が言えず、人に頭を下げてものを頼めない。だから営業が下手というか嫌い。当時、選挙があつて親しい議員さんを応援していたんですが、応援の見返りを期待しているんだろう」と言われた。それに腹が



金市工運動会の応援



金市工の修学旅行で九州へ

立って、官公庁の仕事は一切やらな
いと言って指名願いの申請を全部取
り下げた。選挙の応援やっても私利
私欲の願ひ事は「一度もない」と自負
する。

眞知子夫人の内助の功

そんな武骨な木下が今日の成功に

導いた影の功労者が妻の眞知子夫人
(67) Ⅱ エムアンドケイ取締役Ⅱであ
ろう。眞知子夫人とは23歳のとき、
金市工同窓生の結婚祝いを金沢市内
のアパートで開いた際、隣りの席に
いて見初めた。



北陸ミサワホームの新入社員時代



眞知子夫人は鶴来町(白山市)出
身、金沢商業OGで現在、会社の主
に総務を担当しているが、明るい性
格から販売が得意で、結婚12年目で
長男・隆介取締役を出産、家庭、社
内ともに良き伴侶となっている。
父が創業した木下工務店を継いで

父が創業した木下工務店を継いで

5年ほどして「人の好みに合わせた
住宅や建築物ばかりではなく、自分
の好みで自由にデザインしたものを
手がけたい」と、社名を木下建築デ
ザインと改名した。

異業種交流会に参加



新婚旅行

30歳代半ば。時は異業種交流が
真つ盛り。マッチングによる新分野
進出が事業経営者の時流になり、木
下もさまざまな異業種交流会に参加
する。交流会で知り合った仲間たち
と、実験的な事業も試み、10数名の
メンバーで100万円程度出資して農業
関連の会社を立ち上げたこともあつ
た。しかし、軌道に乗らずに解散す
る羽目に。

営業が苦手だった木下は、異業種
交流会でさまざまな人材と出会うう
ち、人脈づくりの醍醐味を味わい、
「怖いもの知らずというのでしょ
うね。地元経済界の重鎮のような人
たちに、どんどん出掛けていって会
いました。アポもとらないこともあり

ました。不思議なことに皆さん快く
会ってくださった。そこでの出会い
が結局、今の私の財産になっていっ
た」と明かす。

岐阜羽島で魚屋開業

42歳のとき、異業種交流会の
「ニュービジネス創造化協会」で知
り合った回転寿司の今は亡きコンベ
アメーカーの社長から「回転寿司屋
を素人がやったらおもしろいぞ」と
言われる。当時、この社長は回転寿
司業界の高級化を促す第一人者であ
り、建築家としてデザインが好きな
木下は「店舗デザインやプロデュ
スするのは確かに面白そうだ」とわ
が膝を打ったのだった。

読書家で理論派でもあった木下は
異業種参入にあたり、まず鮮魚市場
を開き、魚屋が展開する寿司屋を演
出する戦略を立てる。その第一歩と
して海のない岐阜県羽島市に白羽の
矢を立てたのだった。「代議士は選
挙に落ちればタダの人」の名言で知
られる元自民党副総裁大野伴陸の地
元で東海道新幹線岐阜羽島駅がある
所。

「失敗したら引き返そう」と眞知子
夫人に目配せし、金沢魚市場で未明
に仕入れた魚を軽トラックに積んで
密かに現地入りしたのだった。

(文中敬称略、文・大坪信善)